

2025年度 埼玉親善大使レポート

氏名： 山岸 航大

留学先： スペイン・バレンシア

1. はじめに

「誰もがスポーツを通じてより豊かな人生を送れるようにしたい」。この想いを胸に、私は2024年1月から2026年3月までの約2年間、スペイン・バレンシアへ留学しました。埼玉親善大使として、そして一人の学生として過ごしたこの期間は、語学や学問を学ぶだけでなく、異文化の中で「価値を相手に伝えること」の本質を学ぶ貴重な経験となりました。

本レポートでは、大学院での研究活動、現地での生活を通じて感じたスペインの文化や国民性、そして埼玉親善大使として取り組んだ活動についてご報告いたします。

2. 自身の活動について

私の留学生活は、まず9か月間の語学学校でスペイン語を学ぶことから始まりました。その後、バレンシア工科大学大学院（Universitat Politècnica de València）の修士課程へ進学し、スポーツマーケティングを専攻しました。

大学院では、欧州スポーツ市場におけるブランド戦略やファンエンゲージメントについて研究しました。特に印象的だったのは、「商品やサービスの機能ではなく、人々の共感を生み出すことがブランドの価値になる」という考え方です。スポーツクラブや企業が、ファンとの感情的なつながりをどのように築いているのかを、理論と実践の両面から学びました。

また、学業と並行して、現地のスポーツ留学支援企業でインターンシップにも従事しました。そこでは、日本語・英語・スペイン語の三言語を活用した通訳業務に加え、SNSを活用したデジタルマーケティングにも携わりました。投稿内容を工夫し、現地の文化や価値観に合わせて情報を発信する中で、「伝えたいこと」と「相手が受け取りやすい形」の違いを強く意識するようになりました。

3. スペインでの生活

スペイン、特にバレンシアでの生活は、日本では当たり前だと思っていた価値観を見つめ直す機会となりました。スペインの人々は情熱的で人とのつながりを大切にし、生活の中心には常に「人の幸福」があるように感じました。

家族や友人との時間を何よりも重視し、日曜日には多くの店が閉まり、仕事よりも家族との時間を優先する文化があります。最初は不便に感じることもありましたが、次第に「効率性」だけでは測れない豊かさがあることに気づきました。

また、ビジネスや公共サービスにおいても、数字や成果だけではなく、「目の前の人がどう

感じるか」を重視する場面が多くありました。こうした経験を通じて、社会全体の活力は、人々の心の豊かさによって支えられているのだと実感しました。

さらに、バレンシアは歴史ある街並みと近代的な芸術科学都市が共存する魅力的な都市です。伝統を大切にしながらも、新しい価値観を柔軟に受け入れる姿勢に触れる中で、私は「日本の優れた文化や技術も、相手の文化や価値観に合わせて“翻訳”して伝えることが重要である」という視点を得ることができました。

4. 埼玉親善大使としての活動

埼玉親善大使としての活動では、単に埼玉県の魅力を紹介するだけでなく、現地の人々に「体験」してもらうことを意識しました。

まず、川口市の伝統産業である「鋳物のペーゴマ」を紹介しました。当初は単なる日本の玩具として受け取られていましたが、スペインでも親しまれているコマ遊びと比較しながら実演を行い、実際に回してもらう体験会を開催しました。すると、金属ならではの質感や職人技の精密さに驚く声が上がリ、多くの友人が競技としての面白さに夢中になっていました。

また、川越市の「鏡山」の日本酒を紹介する機会もありました。日本酒に対して「アルコール度数が高く飲みにくい」という印象を持つ人も多かったため、鏡山のフルーティーで飲みやすい特徴を、現地の食文化と結びつけながら紹介しました。その結果、「日本酒のイメージが変わった」という声を多くいただきました。

さらに、書道体験を通じて、漢字の意味や日本文化の美しさを伝えました。自分の名前が漢字で表現されることに喜ぶ友人たちの姿を見て、文化交流とは単に知識を伝えることではなく、「相互理解と尊重」を育むことなのだと実感しました。

これらの活動を通じて感じたのは、埼玉の魅力は名産品そのものだけではなく、それを支える人々の情熱や歴史、そして背景にあるストーリーにあるということです。

5. おわりに

この2年間の留学生活は、私にとって最も挑戦的で、同時に最も充実した時間でした。異国の地で多くの困難にも直面しましたが、埼玉親善大使という役割をいただいたことで、「自分は埼玉県を代表している」という誇りと責任感を持ちながら行動することができました。

今後は、スペインで培った行動力と、スポーツビジネスを通じて学んだ「共感を生むマーケティング」の考え方を活かし、埼玉県内の中小企業の海外展開を支援したいと考えています。優れた技術や魅力を持ちながらも、言語や文化の壁によって十分に価値が伝わっていない企業や人々に寄り添い、その魅力を世界へ向けて発信する“架け橋”となることが、私なりの埼玉県への恩返しであると考えています。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださった埼玉県ならびに「埼玉発

世界行き」奨学金財団の皆様に、心より感謝申し上げます。

